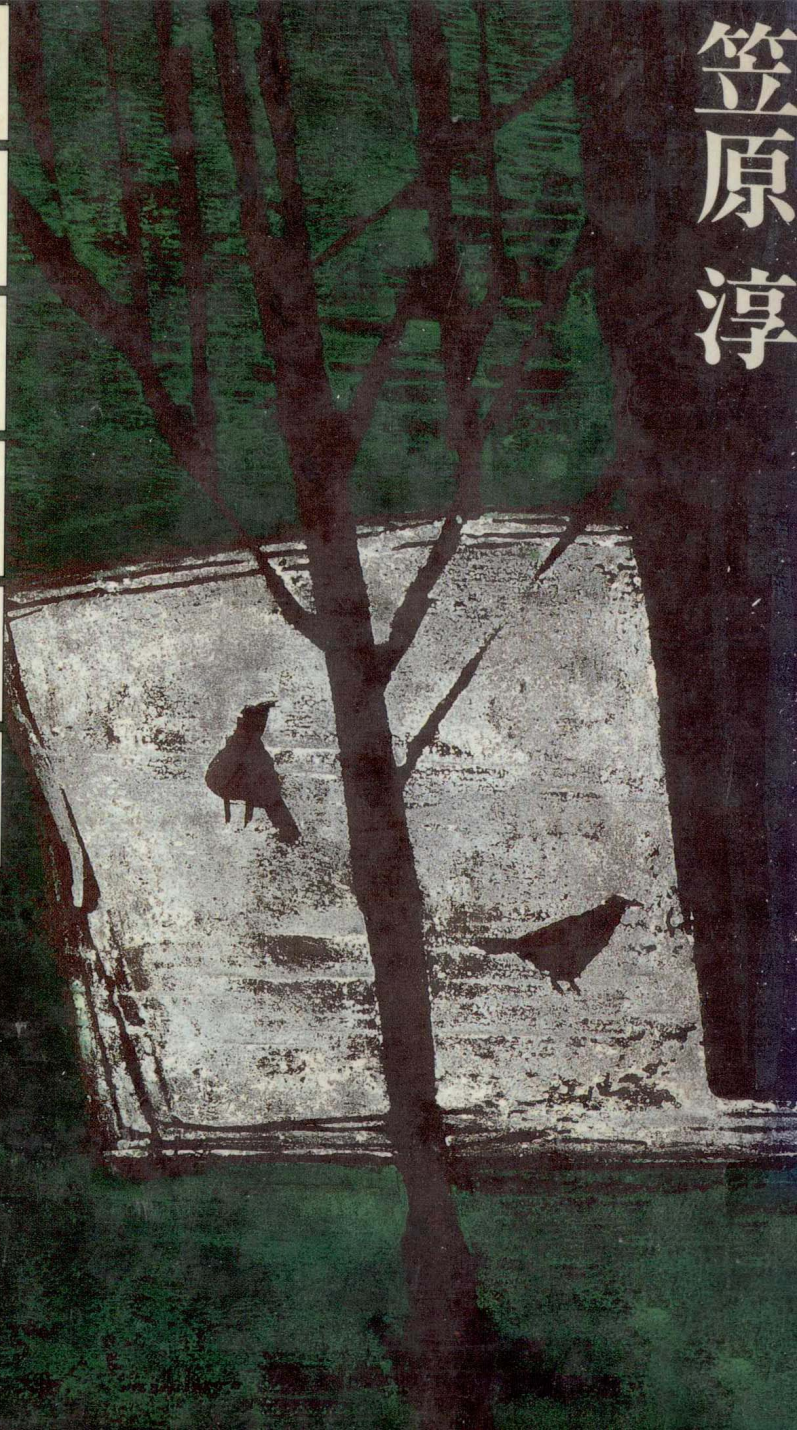


笠原淳

ウ
オ
ー
ク
ラ
イ



新潮社

笠原 淳

ウ
オ
ー
ク
ラ
イ

新潮社

ウオークライ

定価一〇〇〇円

昭和五十九年五月十日印刷
昭和五十九年五月十五日発行

著者 笠原 淳
かさ はら じゅん

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社



東京都新宿区矢来町七十一番地
電話 東京(03)五一一一(業務)
東京(03)五四一一(編集)
振替 東京四八〇八千一六二

印刷 東洋印刷株式会社
製本 大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

© Jun Kasahara, Printed in Japan, 1984

ISBN4-10-352501-0 C0093

目次

ウオークライ	5
仔山羊の行方	47
石の目めぐり	97
だまし絵	153
串　　日	193

装画
小野忠重

ウ
ォ
ー
ク
ラ
イ

ウ
オ
ー
ク
ラ
イ

早朝、まだ湿った夜気がよんでいる住宅地内の道を、緑郎は自分にはずみをつけるように小さく声を発して走り始める。

上下そろいの青いトレーニングシャツとズボンを着用し、赤白青三色の横縞の入った運動靴をはいて、なかなか本格的でないでたちだが、しかし、その走りっぷりはあまり颯爽としたものとはいえない。何か背中にゴム紐でもついていて、それをひっぱりながら走っているという感じである。

丘陵地を造成した住宅地内の道は、起伏に富み、曲りくねってはいくつもの枝道に別れている。白っぽい大気の中に、時折牛乳瓶の触れ合う音や新聞配達のマーターバイクの音が聞こえる他にはほとんど人気はない。緑郎は自分の運動靴の音を背後に聞きながら、自分で決めたほぼ二キロほどのコースをひたひたと走る。走ることに他には何も考えていない。ただ走るといふこの上なく単純な運動が気に入っているといってもいい。緑郎の亡くなった祖母は、毎朝仏壇の前に端座して般若心経を唱えていたが、その種のおつとめに似たようなところがあるなど思ったりもする。緑郎が早朝のランニングを始めたとき、一寸した悶着があった。そつと床をぬけ出して着替えをしているのを、妻の園江に見とがめられて、走るのだ、と言うと、園江はまだ目もはっきり開かぬまま半身起こして、あたしもいく、と言う。ようやくそれを制して家をとび出したが、あとでさんざん恨み言を言われた。

「どうして一緒に連れてってくれないのよ」

「ただ走るだけだ。面白くも何ともない」

「でも、健康のために走るんでしょ？」

「いや……」

健康のためというのは正確ではないような気がした。ただやみくもに走りたくなったから走る。突然ジャンプしたり、石を投げたり、空に向かって意味のない叫び声を発したり、その種の子供じみた衝動的な行為に近いように思われる。そのくらいのことならば、園江を連れていってもさしつかえはないようなものだが、夫婦そろってランニングをするのは気が重かった。そういうものではないという頑なな考えがあった。

「健康のためなんかじゃないんだ。たとえば、うん、排泄作用みたいなものなんだ」

かなり正確な感じに近いように思えた。が、園江は釈然としないようであった。次の日の朝緑郎が出かける支度にかかると、園江は寝返りをうち、ふとんを頭の上までひきあげ、緑郎の行動を無視する気組みを示した。

何日かして、園江はまた思い余ったように苦情を口にした。

「あなたばかり早起きして、あたし、体裁が悪いわ」

「気にすることはない。君には勤めがあるんだから、今まで通りにしてればいい」

「あなたはそういうけど、あたしはやすんだ気がしない」

緑郎は当惑した。園江が苦にするのも無理はないのだ。棟つづきの母屋に緑郎の両親と末の弟が起居している。緑郎夫婦の住居は二年前に結婚する際母屋につなげて二階建てを増築したもので、形の上では一応別所帯になっているが、玄関は一つだし、台所も一つ、従って食事と一緒にしているの、実は五人家族の暮らしである。緑郎は広告関係の会社でPR用スライドの台本

などを書いてゐるが、フリーのライターで収入は安定せず、いまだに生計は親がかりで、中学教師であつた緑郎の父が退職金で建てたアパートの収入に寄生している。緑郎は長年の気ままな独身生活の習性と半ば自棄的な開き直りから気楽げにふるまっているが、園江にしてみれば当然のことながらひどく肩身がせまい思いである。家族と共に食事をするのは夕食時だけで、朝昼は時間をずらしているし、園江は昼の間パートタイムの勤めに出ているので、朝寝をしたからといって不都合なことはないと思うのだが、あなたとあたしでは立場がちがうと言われると、一言もない。よほど一緒にランニングをするかと誘つてやろうかと思つたが、結局何の彼のとなだめごとを言つて園江の苦情をうやむやのままにした。

緑郎の父は、日頃怠惰な総領息子が早朝ランニングを始めたことを知ると、出来の悪い生徒に説教を試みるような口ぶりで、健全な魂のあり方について所感を述べた。緑郎は当惑したが、抗わず聞き流していた。教壇からものを言う口ぶりのときは、父の機嫌のいいしるしなのである。老来足腰が不自由になつてやつと室内を杖にすがつて動くだけの日々を過ごしている父は、むかし郷里の青年団のマラソンで力走したにもかかわらず隣村の馬方風情に破れて無念であつたことや、戦争中学童を疎開させた山中湖畔まで御殿場から一時間で歩いた健脚ぶりなどをなつかしげに回顧したあげく、足腰が駄目になつたら人間はおしまいだなどと言つて緑郎の母の鞆蹠を買つた。

緑郎の母は、いつまでつづくかね、と園江に言つて笑つた。あたしも一緒に走りたいんだけど朝に弱いから、と園江は少しひがんだもの言いをした。おにちゃんはいろんなことを思いついて始めるけど長続きたためしがない、と緑郎の母は言つてから、園江の手前息子を悪く言つたことを氣にしたように、でもむかしはよく朝のラジオ講座を聴いたりしていた、と言つた。それ

を聞いて緑郎は学生時代の日々をチラと思いおこした。たしかによくラジオの語学講座を聴いたり、鉄鉦鈴で体力づくりにいそしんだり、書道を我流で始めたり、尺八を独習したりしたが、いずれも長続きはしなかった。語学講座にしても、いきなり、スペイン語、中国語などと欲ばって手をひろげて、一、二ヵ月もするとテキストが埃をかぶっている始末なのだ。そのでんでいけば早朝のランニングも一週間そこそこで沙汰やみになったところだろう。だが、緑郎は不意に思い立って始めてから半月余り経った現在でも毎朝欠かさずにつづけている。それというのも、ランニングが思いの外快適な運動であるという他に、実はもう一人早朝のランナーがあらわれて、その相手に対する意地もからんで、のっぴきならぬ気持でがんばっている気味がないでもないのだ。しかし、そのことは園江には話していない。

家の玄関を出るとすぐに簡易舗装された二間幅の道で、そこでいったん深々と一呼吸してから、走り出す。

ゆるくカーブしている坂道を上り、丘陵の狭間を走る私鉄の線路を左下に見ながら曲折する道なりにしばらくいくと、十字路につき当る。角を曲ったところに特定郵便局があり、別の角には小さなマーケットがある。もちろんまだシャッターを下していて十字路には人氣はない。まっすぐいくと最近造成された分譲住宅地、もう一方にいくと市営住宅群を通ってさらに大きな団地に至る。この道をとって、市営住宅地を通りぬけ、市立小学校のグラウンドの角から枝道に入り、家に戻るのが緑郎の決めたランニングのコースだ。その十字路が全コースのほぼ折り返し地点に相当する。

もう一人のランナー、黒田に初めて出会ったのは、その十字路だ。ランニングを始めて一週間

ばかり経った或る朝、いつものように十字路にさしかかったとき、ちょうど正反対の方角から似たような上下そろいのトレーニングシャツを着た男が忽然と現われたのだ。緑郎のとほとんど同色の青いやつで、運動靴も似たようなのをはいている。まるで自分の走る姿をうつし見ているようである。モーターバイクにのった新聞配達や牛乳配達のライトバンに出会うのは一向さしつかえないが、同じようにランニングをしている男に出会うのは何だか自分の吸うべき空気の領分に不遠慮にふみ込まれたような気がして不快であった。

先方も緑郎を認めて一寸とまどった様子を示したが、ランニングのテンポをゆるめようとはしなかった。緑郎も、自分の領分に入ろうとする相手を押しやるような心もちでダイグイと歩速を早めた。はかったわけではないが、あいにく十字路の交叉している地点で一緒になってしまった。男は緑郎に目礼すると道を左に折れた。緑郎の方向からすれば右へ折れて市営住宅に向かう道で、それは緑郎の定めたランニングのコースなのだ。緑郎は、コースを変更するのも業腹だったので、無理に自分の首をねじ曲げるように男と同じ道に向かい、ペースを早めて男を追いつめた。やっと自分ひとりになったと思って安堵し、速度をゆるめると、背後に運動靴の音が迫り、眼の端に男の青いトレーニングシャツがうつった。再び足を早めると、男も同じようにペースを早めた。緑郎は道の右側、男は左側を無言のまましばらく走りつづけた。日頃のないハイペースで、そのまま百メートルばかり走ると、息が切れ、緑郎はレースを断念して道端の低い石垣に腰をおろした。男は、十メートルほど先についてからふり向き、しばらく足踏みをしていたが、やがて余裕たっぷりを誇示するように腿を交互に高く上げながら戻ってくると、

「どうしました？」

と、小柄な体格に似げない野太い声で言った。その口調には悪意はないが軽い揶揄が含まれて

いた。緑郎は苦笑して、何でも無いという風に首をふった。男はようやく足踏みをやめると、緑郎の前で屈伸運動を始めながら、

「あなたも毎朝ランニングをしてるですか。もうどのくらいやっておられます?」

「まだ、半月そこそこです」

一週間分ほどサバをよんだが、男は緑郎の言葉を強引におしのけるように、

「わたしは始めてから二ヵ月になります。しかし、お目にかかるのは初めてですな。どうして今まで出会わなかったんだろう?」

男は長年の知己であるかのような気安い口をきく。年恰好はほぼ緑郎と同じ、三十代の後半といった見当である。背は緑郎より一寸低いが、上半身の肉付きはたくましく、トレーニングシャツのほだけた襟元から胸毛がのぞいている。

「しかし、朝早く走るのはいいいものですな。足腰を鍛えるには走るのが一番」

ウム、と気合いを入れるような口ぶりで言うと、男は屈伸運動を終え、腰に手をあてがって緑郎の全身を眺めまわした。

「あなたのトレパンはわたしのと同じようすな。どこで買いました?」

「駅前のスーパで……」

「わたしのは美津濃です」

男は自分のトレーニングシャツの胸をつまんでみせた。腋臭が強くにおった。緑郎は男と言葉を交すのがうっとしくなり、あからさまに男を押しつけるように、

「ぼくはしばらく休んでいきますから、お先にどうぞ」

と言った。男は一寸とまどった表情を浮かべたが、それじゃあ、と言って走り出した。しばらく

く行つてから、男はふり向き、

「申しおくれました、わたし、五丁目の黒田です！」

そういいながら、左手に起伏する住宅群のいっかくを指さした。緑郎も儀礼上やむを得ず、二丁目の島本です、と名乗ると、黒田はしっかり記憶するようにうなずいてから、快活に、ではまた明日！と手をあげ、市営住宅の方角に向かって走っていった。次第に遠ざかる黒田の後頭部の髪はかなりうすく、そのてっぺんは地肌が露わになりかけていた。髪の毛は自分の方がはるかに濃く若々しい、と思い、緑郎はやや氣をとり直して、本来の自分のコースをたどってランニングを再開した。

翌る朝から、緑郎はランニングの時間を十分ほどくり上げた。それまでは別にぎっかり時間を定めていたわけではなく、牛乳配達のリイトバンが自宅前の坂道でエンジンをふかす音を聞いてから起き出し、トレーニングシャツに着かえてスタートしていたのだが、もしも黒田が几帳面に定刻を守って走っていたのだとしたら、緑郎の（或いは牛乳配達の）いいかげんさのおかげで今迄出会わずにすんでいたのだろう。しかし、それは多分ほんの一分か二分のずれでしかなく、むしろ今後は出会う確率の方が多いと思われる。それ故思いきって十分という時間の幅をとったのだ。

園江は緑郎の早朝のランニングについてあからさまに苦情は言わなくなった。決してこころよく思っていないが、見て見ぬふりをしているという風であった。その代りあたしも勤めの帰りに毎日喫茶店に寄って珈琲をのんでくると言い、実際ふだんより三〇分から一時間近く帰りがおそくなるようになった。夕方喫茶店でポッネンと珈琲をのんでいる園江の様子を思い浮かべると、

一寸気がさしたが、それで折り合いがつくならばそれもよからうと緑郎は放っておいた。時間を早めたことで初めランニングの調子が少々狂ったが、黒田よりも一足先に朝の大気を吸っていると思うと、身体の節々にのこるけだるさもさして苦にはならなかった。

一週間ばかり後。朝、といっても午前十時頃、久しぶりに注文の来た仕事のために駅で上り電車を待っていると、

「島本さん……！」

と声をかけられた。野太い、よくいえば朗々としたバリトンで、すぐに黒田だと分った。緑郎は隠れていたところを不意に見つけられたようにうろたえ、ぎこちなく黒田の方をふり向いた。

黒田はモスグリーンのスーツを着て、クリム色のシャツに赤い幅広のネクタイをつけていた。トレーニングシャツスタイルよりもびったり身につけているという感じである。緑郎はライトブルーのスーツに同色系のストライプのネクタイをしていたが、何だかひどく地味ななりをしているように思われて落着かなかった。

「このところお見かけしませんが、どうしたんです、ランニングはやめたんですか？」

「いや……」

緑郎はいまいに言葉を濁して、仕事で夜ふかしがつづいたものだから、と言った。必要以上に弁解してみた口ぶりになったのを内心いまいましく思ったが、黒田は別にランニングについてそれ以上拘泥する様子はなく、

「お仕事という……？」

とたずねながら、初めて出会ったときに緑郎のトレーニングシャツを眺めたような眼つきで緑郎の胸もとから靴先まで視線を走らせた。緑郎は口ごもり、それから出来るだけ事務的な口調で、

広告関係の仕事にたずさわっている、と言った。他人から自分の職業についてたずねられるといつも説明に窮する。かつて広告業界の景気のよかった頃、小規模な広告代理店に勤めて月給をもらっていたことがあるが、数人の仲間と語らい、退社して広告制作のプロダクションを設立してから、間もなく景気がおかしくなり、プロダクションは解散した。以来フリーの立場で収入もはなはだしく不安定である。仕事とか生活に関する話となると自ずと煮え切らぬ応答になる。それだけでなくも緑郎は絶えずお前は何をしているのかという嘲りとも叱責ともつかぬ声を空耳に聴いては忸怩としているのだ。

「広告関係というと、代理店？」

「いや……フリーのライターです」

「ほほう、自由業というわけですか」

「ええ、まあ……」

「なるほど、そいつは結構ですな。いや、つまり、自由だってことができますよ」

黒田はふっと思い出し笑いのような茫洋とした笑いを浮かべると、

「しかし、或る意味ではわたしの方が自由かもしれませんな。自由業のあなたより」

「……………」

「わたし、目下失業中でね。これから失業保険をもらいにいくところです」

茶化したような言い方をすると、黒田はホームにたたずむ人々がふり向くほどの高笑いをした。ドレミファソラシド、といった感じの笑い方で笑いおさめると、一寸斜にかまえた様子で、

「失業といったって、自分から勝手にやめたんですがね」

と言い、自分がかつて勤めていた商事会社の名を言った。かなり名の通った会社で、緑郎が知